



冬乃日活
坤

^ 5
4472
2



5
4472
2



冬月日注解坤

浪花 黄華庵升六著

あし波津りりし火焼家と
すきさくはと

出たあまのものをうつまうまうと久 重五

万葉集三巻は人言火焼家考酢四餅有己我妻古名常
珍記 人言 此をを酒書とくし出さうりに針とくの句に
昔火く家の子けとけとつあかさうすきやてん床め
つーまきりさうりかくはうすたれいしん結しき出た
まね書いといまうめまうとあしとくあつあつん

昭和十
十二月十七日
蔵

あつちのうらみもきつまつまふしやうしけし手もまふしきり
りやいふうしねとひりては空をうらむはく古今集三巻の
お乃やういあやう梅のまひつらういんもねあやうい
書えけいももほろもやういねとひりては空をうらむ
やハのいも不らひりては空をうらむいんもねあやうい
持んもあやういもあやういもあやういもあやういもあやうい
解小芦火くあやういもあやういもあやういもあやういもあやうい
こめつあやういもあやういもあやういもあやういもあやうい
とあやういもあやういもあやういもあやういもあやうい
いふ一節あやういもあやういもあやういもあやういもあやうい
いふあやういもあやういもあやういもあやういもあやうい
いふあやういもあやういもあやういもあやういもあやうい
いふあやういもあやういもあやういもあやういもあやうい
いふあやういもあやういもあやういもあやういもあやうい

あつちの味も風はもさくさくのうらむもあやういもあやういもあやうい
淡々もあやういもあやういもあやういもあやういもあやうい
しきあやういもあやういもあやういもあやういもあやうい
あやういもあやういもあやういもあやういもあやうい
いふあやういもあやういもあやういもあやういもあやうい

あつちの糖ひを 淡々 磨 寒 荷 今

あつちの味も風はもさくさくのうらむもあやういもあやういもあやうい
淡々もあやういもあやういもあやういもあやういもあやうい
しきあやういもあやういもあやういもあやういもあやうい
あやういもあやういもあやういもあやういもあやうい
いふあやういもあやういもあやういもあやういもあやうい

さりたそ懸障も晴ふあき定くんとまの初秋の夜白
 りあつこもを障とすりけの障障の改よまてひあはとも
 にや一軒きりゆへり才三休とよ白もあつらさるあつら
 たりけ味いそ一しあんと定くともあつらてあつら
 すと一そサ五ヶ條日才三の改りよ文才三の定くともは
 一白のよあお白のやうあつらと下のとあつらあつら次乃
 りあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら
 まつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら
 一も撰出にねり才三乃格をまつらあつらあつらあつら
 留まつらあつら一才三の平白とあつらあつらあつらあつら
 一も一作あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら
 後の定くともあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら

平白のつた

あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら 宗因

まき山のねもあつらあつらあつらあつらあつらあつら 仙順

けやあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら 芭蕉

まつらの才三あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら
 しく作のつた才三あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら
 のあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら
 平白あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら
 後廣のつたあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら
 一花と白りあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら
 女乃浦あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら
 竹をまつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら

やうけりて振るうのうらうねもさきん実小功考の仕業
るるる

踏んづるおのの月けうすうあま 野水

そまうつりりしては夜を窓すれのけねともんか
いりてそんたあ白うる骨のまねとま冷まきき体を仙境
ともそひり色て踏んづる六作りとん函ふ林和結の伴
をほのめつせまのうらう

風吹ぬ秋乃日瓶一酒ちの光目 芭蕉

けののうらうたの踏んづるうらう踏んづるうらうたの踏んづる
ともそお空まの容を附けり造りてとらお初の白ひり瓶
の酒まき六作りとん月とらあみ秋乃日と附けり日並
のりりしてと踏んづるうらう初らの或のしらうらうは

と下まきと踏んづるうらう踏んづるうらうたの踏んづる
秋のいとありはうらうに瓶子酒まきとらと忙れとら作
あうらうと踏んづるうらうと踏んづるうらうと踏んづる
百葉の老翁と踏んづるうらうと踏んづるうらうと踏んづる
振ちるる

秋穢るゆきお市小振とる 羽笠

おの酒うらうと踏んづるうらうと踏んづるうらうと踏んづる
好うたの踏んづるうらうと踏んづるうらうと踏んづる
好うたの踏んづるうらうと踏んづるうらうと踏んづる
まきと踏んづるうらうと踏んづるうらうと踏んづる
市所小遊園と踏んづるうらうと踏んづるうらうと踏んづる
おの酒うらうと踏んづるうらうと踏んづるうらうと踏んづる

て季のちり〜のふ〜の傳く季の物つつき〜の初〜
 しくかり〜のん去〜の尚季よりある白もあつた所
 あり茶ももろ〜一慨のん〜一猿蓑集=白の〜の
 意〜の〜の月を八越向よりある〜の白あり同集
 す天のちの月の影を〜け〜の尚季よりある〜
 尚季よりある白の白〜の文ををち〜一風情を
 とは〜し〜ん〜風情の白も振りを付〜の〜
 白も振りを付〜の〜去来抄=ゆ〜の〜
 白も振りを付〜の〜小糖を〜の〜
 振りを付〜の〜風情の文をの〜の〜
 論語 子曰言以達志文以達言不言誰知其志言斯
 無文遠不行矣言以達志文以達言不言誰知其志言斯無文遠不行矣

このこと

賀茂川や胡磨千代祭り微を 荷守

おのふ〜を〜市も振り〜の〜
 あり〜の〜の〜の〜
 の中〜の〜の〜の〜
 千代まつり〜の〜の〜
 あり〜の〜の〜の〜
 と小稲の祠ありは神の好むをみ〜
 して〜の〜を植〜の〜
 を胡千代まつり〜の〜
 七夜被ふ出〜

いん〜の〜の〜の〜 重五

うらやまをうらやましくして腕まをきりし敵をのちうらな
ふく我身のうらやまの合をうらやましくうらやましく
将軍の入に巡る鴨すうらやまのうらやまのうらやまの
鴨すうらやまのうらやまのうらやまのうらやまの

火をうらやましくして遠くをうらやましくして 芭蕉

うらやまの附りしてはるはるうらやまのうらやまのうらやまの
うらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやまの
うらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやまの
うらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやまの
うらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやまの

門すのうらやまのうらやまのうらやまのうらやまの 重五

うらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやまの
うらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやまの

うらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやまの
うらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやまの
うらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやまの
うらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやまの
うらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやまの

血刀のうらやまのうらやまのうらやまのうらやまの 荷守

うらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやまの
うらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやまの
うらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやまの
うらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやまの
うらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやまの

うらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやまの 杜國

うらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやまの
うらやまのうらやまのうらやまのうらやまのうらやまの

の中もなつていそぎして武家危殆の多くして志も人氣の荒
きゆよーあはれいそぎ場をんきとらうし句とい園うらあー
ふるせ時ふちりてー 暮下りてい月のくまふとらあ
アヤしく落セツキハ血刀隠すあけくこの執事ん

みちやうり納豆とくまふくし 野水

ななと秋の附りしてぬこの気色と丈ををとりぬ豆と
作りて秋季の終り待の一字は拵をるおとらうしそら
当季より葉しくる白ちれなる小振を附る故人の白作
を味あけー

花小はく楳の徴とすくはり色 芭蕉

左ハ昔句の納豆とくそ人の位を定めしけくると楳の徴
と拵よりとる去の白りして葉季よりんされうとぬけ句

まむらうしーく解きー先楳の徴とすくはり色と徴の字
韻會曰徴支韻敗切徴也カハクミとわり 説文物中久雨
而青黒也ちりけ徴の衣の徴敗切ぢなれん衣乃やれり
ー 貌げらるるー 是をとくしをを解せんとする次の白
の傍よのいりぬ敷冬をのむトソ白より照ー 合をてんか
月しふよ執事とらうい是列 五欲亦花の境をまぬうと
さるりのうしけく小業障の嫌さるるーと悟りてそ有る
の若欲を拵てそ方のるん小んとのまゆわあーん ぬけのさ
花んとちれつん乃すまのそとあす楳の外あそありと
さかひ昔ー 是小着ーと地とまらうー人もあさるんはそ
ほーい痛也のあーちかぬ利のそあ小深く俗彼官務の
垢をまきとらうし楳の徴と拵らるる小作らるりのさるー

或人の一語一徹と納豆のうづりちりく一に河く亦蒙求
淮南子曰墨子見練絲而泣之為其可以黃可以墨矣
中書子う泣くともろい不御ちりくさ絲のまよふ事小治るる
今もそとく一極の無色を小治るるの垢を抜き極の徹よ
中されしん

傍このいしに 欵を故 吞 羽笠

まのさ白小極徹と拵よりトリしをす味つてるれ花小泣
の極業陸の極と極の徹と拵よりト無色を弄るるに
入る人ちりく一とて傍六附より一のいしにト志るるの
行りくして山吹と口ちりの極語ちりく一古今俳諧多部ニ
山吹のまをくちりく一や九同とちりく口たりしりく
扱まを吞ト作りしりく山吹のまを或を下ちりく

或人の解小山吹とまの茶録とちりく茶録とちりく
のまとりちり子細ちりくも季をとりりりるん末ちりん
吞とちりつちりく食類の類ちりくさい赤越小納豆とちり
とちりく陳とちりく曰白の表小山吹を吞トりちり山吹と
食類ちりく寸尤山吹の下ちりちり九の水をちり飲とちり
可ちりく一とちりくも白の表をちりし湯すり時ちりちりま
の食類の所ちりく一ちりく一ちりく蕉門ちりくの他語ちりん小
食類ちりく付の是非とちりく終ちりくねちりくちりく又ちり
一語小律制小湯水茶の類ちり食類ちりくさいれにちり
とちり解とちりちりくも律の法をちりく他語の拵合を標しり
ちりくしをたちりく律儀小湯水の類食類ちりくちりちり
他語ちり食類ちりくちりく二句ちりくちりちりちりちり

飾りてあやかし今予の解のしとてあやかし山吹のやまを
吞とあやかしとてあやかし一ありの飲食の類あやかしとれいそ類ある
へいそあやかしあやかし人のいそは住してあやかし

水一羽をけむ 荷字

まよひあやかしを吞とあやかしとてあやかしとけむとてあやかし
のあやかしとてあやかしとてあやかしとてあやかしとてあやかし
今試小解とて予のあやかしとてあやかしとてあやかしとてあやかし
僧傳云鷲峯山ニ春半黃花ヲ開ク艸アリ大サ手ノ指許
有其子同ク黃也曰春女花山吹ニ相當也故とてあやかしとてあやかし
とてあやかしとてあやかしとてあやかしとてあやかしとてあやかし
九傳の体とてあやかしとてあやかしとてあやかしとてあやかしとてあやかし
の山吹とてあやかしとてあやかしとてあやかしとてあやかしとてあやかし

をりてあやかしとてあやかしとてあやかしとてあやかしとてあやかし
あやかしとてあやかしとてあやかしとてあやかしとてあやかしとてあやかし
まよひ

宜者か 一あやかし 銀を練す 重五

けりてあやかしとてあやかしとてあやかしとてあやかしとてあやかし
りてあやかしとてあやかしとてあやかしとてあやかしとてあやかしとてあやかし
まよひとてあやかしとてあやかしとてあやかしとてあやかしとてあやかし
まよひは本草時珍曰人見白燕主生貴女故燕名天女
笑亦の一説とてあやかしとてあやかしとてあやかしとてあやかしとてあやかし
まよひとてあやかしとてあやかしとてあやかしとてあやかしとてあやかし
一説あり亦或人の解とてあやかしとてあやかしとてあやかしとてあやかしとてあやかし
銀とてあやかしとてあやかしとてあやかしとてあやかしとてあやかしとてあやかし

母も持りとりかゝりて長命孫の家を殊又小目出さし
おちりて釵の定ち下りて長命孫のちりてさうく
ををりてきは附くるものありて 釵のや 秦穆公以象
牙為之敬王以玳瑁為之始皇金銀作鳳頭以玳瑁為脚
曰鳳釵

かゝりてさうくさうく七夕のけま 杜國

さうくさうの八十まをさうくさうくを二百四十才のまをさうくさうく
凡人さうくさうくさうく 仙人もさうくさうくさうくさうくさうく
白目小目さうくさうく 林和結の仲もさうくさうくさうくさうく
さうくを披りて扱ひ天人さうくさうくさうくさうくさうく
と秋季を附くる寓さうくさうくさうくさうくさうく
此の風調さうくさうく 赤の二はさうくさうくさうくさうく

さうくさうくさうくさうくさうくさうくさうくさうく
迎へさうくさうくさうくさうくさうくさうくさうく
を用ひさうくさうくさうくさうくさうくさうくさうく

西土判小桂のさうくさうくさうくさうく 羽笠

さうくさうくさうくさうくさうくさうくさうくさうく
南へつはさうくさうくさうくさうくさうくさうく
さうくさうくさうく

さうくさうくさうくさうくさうくさうくさうく 芭蕉

さうくさうくさうくさうくさうくさうくさうくさうく
器曰蘭草生澤畔婦人和油澤頭故云蘭澤是は若袴
のさうくさうくさうくさうくさうくさうくさうく
市人の油さうくさうくさうくさうくさうくさうく

まゝト柏子をみてけしむるあゝんを

残乃ちか子賢あつ女アんくくの家 重五

けしむる茶の油とりやれ女のあけらあふんし一丈を賢あつりト
けしむる茶の油とりやれ女のあけらあふんし秋風辞蘭有秀分菊
有芳懐往人今不能忘矣かゆふをよもや合せて賢あつりト
けしむるト一けしむる茶の油を絞る家のあつりあふんを
あつりけしむるあつり女ありけしむるあつりあつりあつりあつり

約瓶小栗をまわりのくれ 荷兮

まわりの多家の用をけしむる栗はけしむる桶をまわりのくれ約瓶よふ
作しむる前人句の賢あつりあつりあつりあつり

まわりのくれかき梅子うさけ正月了 杜國

けしむるくれかき梅子うさけ正月了けしむる釜を桶をけしむる

けしむる約瓶よふまゝトその器物のけしむるくれあつりまわりのくれ正月あつり
けしむるものをまわりのくれあつりあつりあつりあつりあつりあつり
に梅子トけしむるあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
梅子トけしむるあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
けしむるあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
けしむるあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
けしむるあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり

けしむるかき手向くあつりあつりあつり 宮 野水

けしむるかき手向くあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
けしむるかき手向くあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
けしむるかき手向くあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
けしむるかき手向くあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
けしむるかき手向くあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
けしむるかき手向くあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
けしむるかき手向くあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
けしむるかき手向くあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
けしむるかき手向くあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり
けしむるかき手向くあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり

一、すつ水やも洋よき心をきくは後考をけのし亦説
包ミ手向るしトリ解ありきん伍名少し書くはいあり一
此解杜撰之數手向るは疫癘赤の除厄のくわ正月を仕
立して祀ふちの神をすし一はなま系神樂やのり
む云ちうく一

寅のりせ且を鎮治乃急を起く 芭蕉

け世故翁の事少くも知く一試ふ小一は解を在りたの源治
名命を蒙りしと名なりを起す一とらんを起す
よ社のちうく小及いさかひ勇者の存くろふお訪て扱
て名叙成就を祈るるとや附く一人を宮の一字の起す
聖とさちうく一

一雪かうさしき南京乃北 羽笠

け白の源治とつるより吳の干将を名のきてす南京の地と附
ちしんす南京りと吳地ちなりとせきとつり一きとつら一
楚威王りの地も王氣ありをりし金を埋こし以て是を鎮と
すりゆくと金を金陵と号きりり刻今の南京とせきとつら一
とつり一白乃文一とせきとつら一と作れちうく一

秦始皇以金陵有都邑之氣改曰秣陵矣

いこうさしけ誰ともまぬ人の像 荷兮

うないさうあしとつらとをきくるとんて附くちま都の法真隆の
地より一昔一よりつらとをせは仙閣あまうとありとてかあ七
葉乃ちあや太史とんぬりさ仙と連あしすさつらとを
とて是をさしんふさやる旧都とせきとつらとを
とつり一とつらとをせは仙閣あまうとありとてかあ七

ちりて〜いりさハ端端玉垣ヲ類ス

泥〜い〜り〜のき〜り〜た芥の根重玉

けけのさ白の係をさ借置さる唐さ玄のた〜ち〜り〜と〜ん〜と
後君子す〜して後宋の茂叔つ〜とさあ〜んと愛蓮説を扱
向〜〜〜泥水〜り〜のは〜さ〜六作り〜と〜ん芥の根の供〜の〜
〜泥水〜清〜と〜いり〜ん〜つ〜ち〜り〜

粥す〜り〜ち〜り〜き〜花〜り〜と〜まり 野水

心のほ〜〜い〜り〜つ〜り〜ほ〜さ〜陸逸の境界を〜と〜付〜り
飯 蔬食 飲水乃徒あ〜り〜と〜 詩子戀花林下飲愛草野
中眠〜〜のれ信を〜り〜て俣〜さ〜り〜

袴衣の下〜り 澄〜り〜お〜ろ〜り〜の 芭蕉

〜り〜大〜に〜変化を〜と〜り〜け〜さ〜り〜の粥す〜り〜と〜ふ〜陣中

と〜て〜け〜り 扱を武者あ〜老〜も〜さ〜ゆの〜ら〜ら〜さ〜ぬ〜と〜ん
に迄の一字の〜り〜り〜け〜り〜ら〜宛〜して子武者あ〜り〜と〜 雑兵
武者乃熱い〜り〜ら〜さ〜り〜と〜と〜ん大夫敦盛杯の侍をお
〜り〜ら〜と〜し〜ん袴衣の下〜り〜風澄〜り〜と〜り〜
〜り〜ら〜の粧ひあり花〜り〜ら〜初陳と〜ん〜と〜り〜
〜り〜ら〜の幻粥ち〜り〜と〜と〜り〜の〜り〜ら〜も〜さ〜り〜
と〜り〜ら〜この出陣さ〜り〜ら〜と〜

水の〜り〜と〜り〜ら〜ら〜 やりて 羽笠

初陣をとんとやれ体をさ〜り〜に付〜り〜れ〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら
少兵を用いませ

袖〜り〜の夢を青〜り〜ら〜ら〜ら 杜園

ふの〜りのち〜り〜の体〜り〜と〜と〜り〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら

はらへをひくもり僅小十歩

つみひて月よりさほすーくねる 杜國

はらへをひくもり僅小十歩のあつりさひをそしきつひさう
書ふもつりつり例さにつひのん安さよき一のそつり越人
う白は故答字を加つて別僧と説を設けあつてあし難ふ
あつりの光りをさうけつりーくねる前さの大切のこのこん
りりんきつりつり白さの僅小十歩のつりさーくねるつり
つりあつり月おつりさつり方方つりさの浮世のつりつりつり
つりあつりーくねる大いさつり

氷ふもつりあつりのいさつり 重五

庭の面をちと乾くぬ小夕まのつりさひきつりつり月つりつり

つりつりつりーくねるのつりつり乾くぬの氷のつりつりつり
月、乾のつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
けつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
念不住猶如電光矣さつりつりつりつりつりつりつりつりつり
刹那生滅さつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
つりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり

菡乃ホのさふを、初竹人か矢も負て 野水

さふさふさつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
さつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
つりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
さつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
さつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
さつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
さつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり

むねふしのあまを画さるめ

山の侍門を押し鳴る 音 芭蕉

さる歯乃木のそふをさちりけり 粧ひ飾りさるるわく眼を
つけし侍所よ初まの音と附り例さる後赤の奏とさる
のさるちまね成系うさるり 林示さるく一頁をさるるくく先社ま
るけりあはれさるくさるるさるるさるる年中けり百か合 初まの千
代の例のさるるあつねさるる我君のさるる山の侍門よ山と
極陰ふりく卑妙の考り通入すんき門ちるるさるる一赤
小窓閉くの極りくくさるる以押し鳴ると作りさる一陽す後の
さるるん

一る糞臭く扇一風の赤さるるみ 荷分

さる大内のさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるのせ

表の掃ねとさるる北の侍門ちるる冬のつらん鎖しとるん
さるるんをさるるて掃除の体をけしとるんさるるさるるさるる容を
一の化粧をさるる扇りくさる糞掃くさるあさるるさるる乃
きうすさる侍門をさるるさるるさるる

茶の湯考あしむ那さるるたんちり 正平

掃除とさるるさるる茶無好をさるるて茶の湯考と付
さるるのサのさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
あさるる不浄の掃除さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
すさるる掃りさるる一銭をせをさるるさるる一衣無さるる

さるるたけの物さるるむねり つきさ 重五

けりさるるの茶人儒者のねを讀めを讀めとせさるるさるるさるる
体をけりさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる

りふさあをらふらふを芳なる女まふらふ物
傳くさうらうー女まふらうー原氏まらうーけまふらうらうら
らうらばわらまふらうらまふらうらまふらうら傳の字こ
らうらうらうらまふらうらうら又原氏にぬるのうらうらま
らうらうらうらまふらうらうらうらうらうらうらうらうら
らうらうらうらまふらうらうらうらうらうらうらうらうら
はうらうらうらまふらうらうらうらうらうらうらうらうら
連うらうらまふらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

杜國

まふらうらうの娘の情を押しうらうらうらうらうらうら
らうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
まふらうらうの娘の情を押しうらうらうらうらうらうら
らうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

まふらうらうの娘の情を押しうらうらうらうらうらうら
らうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
まふらうらうの娘の情を押しうらうらうらうらうらうら
らうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

芭蕉

まふらうらうの娘の情を押しうらうらうらうらうらうら
らうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
まふらうらうの娘の情を押しうらうらうらうらうらうら
らうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

野

是等の場を附くは花のすくはつてよよ吹かれらるやうな花の
よのほ月入もるくは秋風烈く吹送るるとんくは花の
苦草のほをんくは花を新草草花はトあつてさるは作
しんくは念あつて

新月お双六抄の縁二條一々 杜國

ちのさうくさくしてさあすの風流らうを双六抄とあつて
附くは白まはくさの坊小ゆるらうて位楽の二字一
双六のおひを白りせらる

新花買えらる一ほくまはきく 荷兮

新月おくまはきくは花を附くをさうくは
花の本草綱目所種二月至五月開花晨乗露采花とら
ねらちの双六抄新原小名をさくはくまはきくと種

お作らる新月おくまはきくは花を附くをさうくは
念をさうくまはきく

志のさうらわさくは織を作り居る 野水

紅毛買ふくまはきくは用をさうくは織の衣裳をあつてはさう
まをさう商人おくは付くは子服一統の場まは織あつて織作
らるは作者の傷く付くは織人のゆめあつてさうらるは
浪人の住居く付くは織人のゆめあつてさうらるは
あつての業をさうらるは織人のゆめあつてさうらるは

命婦の君さうり米あんとこす 重五

志のさうの業のさうらるは織人のゆめあつてさうらるは
りかゝるは所は浪人さうらるは織人のゆめあつてさうらるは
と付くは織人の業のさうらるは織人のゆめあつてさうらるは

附きしものなほに穢ちかひりもす人き業ありのたふしを録
のふとして次を附するなり扱ひまおさるる一蕉門公の扱ひ中一
ふしてたふしを論じらるるもそのふを能く足らぬなりと論じ
こと難きもの論じらるるも其論は或は性なる論論なるも
白の論きをのつる論の所はなるものいふくは論を論じらるる
て曰ふこと附する蕉門の傍に他門の論を論じらるるとして論
りたりと論じらるる論を附するなり一蕉門の論は性なる論
ふしを論じらるる

はつさきさき津浪の水さらぬゆ 荷兮

左の津浪一郷一秋のさきさきを附する米を禁裏
らるる津浪の米と扱ふこと

佛喰ふる魚あはれな まり 芭蕉

津浪の大意は大魚の岡よりと附く仙喰ふる一
白の論向を論じらるる一江戸鮫井の仙は大魚乃後中より出
現せしこと亦濱州にも魚の後中より形はあひ一志ん
の作仙なりと論じらるる一も今もこの例一いふなり

縣ゆりたる人びと作らるる 重五

け付いふ大魚を解くを浦辺の長老らるる一と論じ
はるるよきやうなる長老らるる花の咲くはるるの仰山なる
花んを借して年々たりたりと作らるる長老らるる名を
いふは花んはくしと論じらるる作らるる作らるる
花んは希の名なりありと論じらるる一と論じ
日向國も花んは希と論じらるる長老らるるありと論じ
はるる男子の録なりと論じらるる長老らるるの略也



五形董乃島 亦 及 杜園

左より董董の姿をよみ附くち白の波岸月小花子徳
ひくちる語本者の名過きりきりもよみよとの甲人きり
作九浦山まゝ一七者ちねも巴う葉花小多くの田原を
も董董もよみて今いぬに反りも形りよまんまきさき
く五形すこれのよもよも世を訊くよん

ウ水いかに啼くよ言者ちりくも 芭蕉

五形董の姿抄あゆくの暖きりまを附くち
まの董のこちねねあこり月こ 野水

はるよきにまのりのうらうらうらもりも午よひも
ちろく眠るもよん

おうよもねや矢矧の橋乃ちうもよ 杜園

ふゆをよみよの橋に扶葉才一のそ橋より長サ計百八と
こ秋ほのるのねありゆくを橋乃ちききとありあふり
矢作のやう日本武尊東征時作矢奉之^キラ^ラもりよん
呼作ちよん

唐 忍のねをよみよん送るぬ 荷兮

ちるのや外よりあ手ふ葉を眼よみてよみよ下まのねもよ
あふり付くちよよ言化ありよんよ言よのりよん小唐を
了年かきり或いね礼ねのねもよありてねよちよよ代の
葉をよみよん送るよんよん

持し子よよ葉前よけのよん 野水

よね起情のけよ他のよよよよ送るよんねねねよ
よよよよよのよよよよよのよよよよのよよよ

くろし時遅くかりとめのそとくゆみそり子ひりい
アミウ人の傍アのうそしすゆはきくも持るるうさるん今
相分りしうさるん一本のねりもとありしうせ種さよめ
今いりす出りくありつんと他の中をせをいしゆめは
けし頻りよわりのあつしくあをうして成人るうれを
案前もゆと延つしんしきうゆいそまいたくたねのこゆ
しと年七十三才あしんをわけの作は文書しけいといひ
子の垣這ふねあうんりるしりあまうりといふやきん亦
小所物くろしゆ五せあうと教ふゆくと培室のちうたのしり
ねりきしき母をを信し小所を持るしりけいねのねとま
一字は解小使ありしうそを思し合せしんんきこ

二十りをとすちりく刀 賣年 重五

けい人の親の子を名あうりあまあけり子を捨しりり
凡十二年の経ありしけい今いし子の我手小りりてかま
しりく育てしんゆは刀をも持せしけいねを樂しり
多しき中のんをもうきめねしと老の位りともあしん
身いしりく小老いゆさありりあし兼入るあけしき代
乃刀さく賣拂つてあ命をゆふく海少たさうしき身乃
うしりりすあまよさのいせりてうちあうさああしり
あし二十りうさくし大しりのねあしんゆいの子をあまの
しりをもせよああしりりしりねしりしりあしりりしり
しりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

雪乃狂異の國をうさめりしりしり 荷兮
是れ東坡杯の付りしりしり白のさるん流るあは流向をさるん

てちのりゝの宿老と付り異國乃詩ね人雪の真少
一へ訪ひ来まきる人多しきい風人の雪よりあまの秘
許の刀を柄小代て容れ身を信友の交り遊遊の伴と函ふ
一詩よ黄金不多交不深ともしりれらるる朋友の信
るさ人間の存けはをも滅めりる一

襟をこりし神をこりし 芭蕉

衣いあらふやとと寝人ふ世女の對し扱けりて袖をかき袖をこり
人も用一雪人の風狂人と付し句ををたりし袖をこりし袖
を襟扱ふより袖さつかり一ちさるる一ねむ出れはかきこ
ふしにきみひと一き曲りのちりて異曲の雪をこりて風ね
をそらるる雪人の物好みる一異國乃雪よハ雪所望朝鮮
笠東坡雪の雪るる一しと風俗乃異体をこりてとんとんは

あさ人と襟を棺も吞むさん 重五

あさる終り片袖を襟し子んたり水のおり一もねん揚屋乃大
騒ごと付り句ををぬの風俗亦あつてしり吞むさんい
襟み下して然るものも棺をこりて二世も世も物りいひ
と碎無乃体ありしつらととを劉伯倫をこりて酒を
ふり一劉伯倫性嗜酒嘗攜一壺酒使以荷鋪謂曰
死便埋我

芥子のひとくり名をこりて禪 杜國

衣い悲の叔教を付く一を一とをオオ襟を棺もさんと
りる人いこのうくはとのいひ一死をこりてか
畏きさる氣を衣いこれ寒きし悟るん世の人をさん
一休禪師杯の付を付しん

三日月の末の晴く鏡乃勢（芭蕉）

是伸（白）の申して春子の心ととまらう入わらう子と附て諸
行と考うたうらうらんけいすうくとして凡情をうく
わらうれをかうらわの白く却く作うるをよのうらんを
晴くの洞力なり

秋の鏡を二井寺とすうく岳巖湖を附てうね秋夜湖也

即ち秋の鏡を二井寺とすうく岳巖湖を附てうね秋夜湖也
無と途うよ赤壁の抱ひをもとむあつて波うら客の洞蕭
を吹ひのあり抱真（白）のうらうらうらうの遊ひも琴や
まうらんちうやうと頻りうらうと忽僕をうてまを
かきうりまを強くとうきあうらうと彼西博子眼一統の場

をうらうらうらう一端の真も乗く借るはと借るはと
叶ふてや真もうらうらうらうらうらうの例のものか
まうらうらうらうのうらうらうらうのうらうらうらうらう
あうらうらう

亭のうらうらうとゆるくをを放りぬれ 杜國

まのうらうのうらうらうのうらうらうのうらうらうのうらうらう
まのうらうのうらうらうのうらうらうのうらうらうのうらうらう
まのうらうのうらうらうのうらうらうのうらうらうのうらうらう
まのうらうのうらうらうのうらうらうのうらうらうのうらうらう
放生のうらうらうのうらうらうのうらうらうのうらうらう

まのうらうのうらうらうのうらうらうのうらうらうのうらうらう

まのうらうのうらうらうのうらうらうのうらうらうのうらうらう

陽つゝとちれいとくも嵯峨たぐりの木影ある地小庵をと
てそらち静くしてひひすちりて居る体をかよりやふるまよと
声とさよハちをうら小唄やえうせのちるまよとちちれくと
へ居る後世者のまよいと殊勝と

うけうすさきり燈けい小起伴々 野水

まよひのまよひのまよひをゆきを人をつくりあを陽とよりう田家
の伴位をちりあやうせとちり細きまよよりいあやうと
すこまよひをちりあやうとちり燈の火のちりくまよひ
まよひ—まよひのまよひの函にまよひの淋—まよひまよひ小起伴
位をまよひのまよひ

まよひのまよひのまよひのまよひ 重五

まよひのまよひ—まよひのちりてまよひ密くまよひりやせんまよひ
まよひまよひのまよひ—まよひのまよひ—まよひのまよひ
まよひのまよひ—まよひのまよひ—まよひのまよひ
まよひのまよひ—まよひのまよひ—まよひのまよひ

まよひのまよひのまよひのまよひ 荷兮

まよひのまよひ—まよひのまよひ—まよひのまよひ
まよひのまよひ—まよひのまよひ—まよひのまよひ
まよひのまよひ—まよひのまよひ—まよひのまよひ
まよひのまよひ—まよひのまよひ—まよひのまよひ

まよひのまよひのまよひのまよひ 芭蕉

まよひのまよひ—まよひのまよひ—まよひのまよひ
まよひのまよひ—まよひのまよひ—まよひのまよひ
まよひのまよひ—まよひのまよひ—まよひのまよひ
まよひのまよひ—まよひのまよひ—まよひのまよひ

白くもくもくして花の影に人づかぬ魂をみゆり
あふくはくもくもくして死す人の心く
ちり月の花のぬ　そねりきとやきれこん　凡務のふり
さくらばむりもくもくあひりく

田家眺む

二月月や鶺鴒のほくくあひりて　荷兮
はさむをくひのささくくひあやせり鶺鴒のそまふり毛をむま
く風ふむくく二月のそまふりくわたりくろくいとくくひを
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
ぎくくくと眼サキリ小隠サキリくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

あーあ　扱けむの賞するはふりくくくくくくくくくくくく
きんとうけ極とささくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
ささくのけりくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
を即今ひく眼サキリ下サキリくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
冬ツキのわらりののわらりくくくくくくくくくくくく　芭蕉
をぬくツキのわらりくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
そのまゆけ極とささくくくくくくくくくくくくくくくくくく
余りけりくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
も我もまゆへきく左傳曰趙衰冬日之日也言可愛趙盾夏日
之日也言可畏云云まゆわらりくくくくくくくくくくくくく
春りのせむくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
して文くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

酌とる童茶切りのく野水

けりい或人の後よまもろさ果是く小内さねとらあぢらひの言使り
ちりりよあつた体のえわねいねいねあぢの胸さうらうらう
け解あつらうらうらういさ白い童茶切りのけりい
をまろめしきよあつた果是く小内さねとらあぢらひの言使り
とけりいよあつた体のえわねいねいねあぢの胸さうらうらう
は耐よあつらうらうを茶切りのけりい
秋のくちり様の内茶切りのけりい
芭蕉

昔白馬の奥の茶切りのけりいよあつた果是く小内さねとらあぢらひの言使り
ちりりよあつた体のえわねいねいねあぢの胸さうらうらう
け解あつらうらういさ白い童茶切りのけりい
をまろめしきよあつた果是く小内さねとらあぢらひの言使り
とけりいよあつた体のえわねいねいねあぢの胸さうらうらう
は耐よあつらうらうを茶切りのけりい
秋のくちり様の内茶切りのけりい
芭蕉

小庭つとく若さるぬありけりいよあつた果是く小内さねとらあぢらひの言使り
ちりりよあつた体のえわねいねいねあぢの胸さうらうらう
け解あつらうらういさ白い童茶切りのけりい
をまろめしきよあつた果是く小内さねとらあぢらひの言使り
とけりいよあつた体のえわねいねいねあぢの胸さうらうらう
は耐よあつらうらうを茶切りのけりい
秋のくちり様の内茶切りのけりい
芭蕉

漸く秋のけりいあぢらひの言使り

昔白馬の奥の茶切りのけりいよあつた果是く小内さねとらあぢらひの言使り
ちりりよあつた体のえわねいねいねあぢの胸さうらうらう
け解あつらうらういさ白い童茶切りのけりい
をまろめしきよあつた果是く小内さねとらあぢらひの言使り
とけりいよあつた体のえわねいねいねあぢの胸さうらうらう
は耐よあつらうらうを茶切りのけりい
秋のくちり様の内茶切りのけりい
芭蕉

寂しく秋のけりいあぢらひの言使り

昔白馬の奥の茶切りのけりいよあつた果是く小内さねとらあぢらひの言使り
ちりりよあつた体のえわねいねいねあぢの胸さうらうらう
け解あつらうらういさ白い童茶切りのけりい
をまろめしきよあつた果是く小内さねとらあぢらひの言使り
とけりいよあつた体のえわねいねいねあぢの胸さうらうらう
は耐よあつらうらうを茶切りのけりい
秋のくちり様の内茶切りのけりい
芭蕉

昔白小兩足の体をりのめりやねいさ山を歩けりあの子の立のちふ髪
天のさぬを付くことばお茶の白ひを拵やうへへ

短退小鳥帽の女五三十一 野水

まると三つやう白のつつきとねらさうの体は風のまるとつやうや
付を起して意の白をさひまきりまもるやりの女五三十一花
やうん作りてあやうこの宮女を遣ひの遊真とさうとさうといと
まやうとさう

短退小鳥帽の女五三十一 羽笠

まの短退よりお茶の白をさひまきりまもるやりの女五三十一花
やうん作りてあやうこの宮女を遣ひの遊真とさうとさうといと
まやうとさう

ちり花子う宿の老あまうへへ——意の体ねよかく——書の花
ふらん付くことばお茶の女五三十一あまの侍女りくえや
の遊真とさ花老の老過ちりきり

ちり花子う宿の老あまうへへ——意の体ねよかく——書の花

ちり花子う宿の老あまうへへ——意の体ねよかく——書の花
ふらん付くことばお茶の女五三十一あまの侍女りくえや
の遊真とさ花老の老過ちりきり

ちり花子う宿の老あまうへへ——意の体ねよかく——書の花

ちり花子う宿の老あまうへへ——意の体ねよかく——書の花
ふらん付くことばお茶の女五三十一あまの侍女りくえや
の遊真とさ花老の老過ちりきり

さうさやう花柳の香をうけいぢーの人の神のまゝなる物子
そのおろろ乃在あー書録をいへんまゝさうさやう山家集
奉白集の教ひのありあけさう書名をいへんまゝさうさ
に私小名をいへんまゝ庸凡の人乃及まゝさうさやう麻子の
名実まじりまゝさう白あつりてまゝ傷りまゝさうまじり
まゝさうまゝさうまゝさうまゝさうまゝさう

江をさく 独樂菴と 世を捨く 重五

まゝ集編とさうさやう遠く西上人近くは喃子杯の付とてま
人の言をいへんまゝさういへんまゝさう他意まの白あつり
いへんまゝさう凡人をいへんまゝさうまゝさうの麻刈とて
まゝさうまゝさうまゝさうまゝさうまゝさうまゝさうまゝ
集編あ人の世をいへん破りて安く生涯をいへんまゝさう
まゝさうまゝさうまゝさうまゝさうまゝさうまゝさう

おろろ乃在あつりてまゝさう俗言小ふ喰まゝさうおろろ乃
崎宗鑑は海濱州の浦方明波のむろり小信りて大龍波の
編集あつりてまゝさうまゝさうまゝさうまゝさうまゝさう
流のまゝさうまゝさう

あつりてまゝさう 杜園

まゝさうあつりてまゝさう俗言小ふ喰まゝさうおろろ乃
まゝさう又此集をいへんまゝさうまゝさうまゝさうまゝさう
仙者といへんまゝさうまゝさうまゝさうまゝさうまゝさう
ろろ乃在あつりてまゝさう俗言小ふ喰まゝさうおろろ乃
欲の信風とてまゝさうまゝさうまゝさうまゝさうまゝさう
まゝさうまゝさうまゝさうまゝさうまゝさうまゝさうまゝ
出よとまゝさうまゝさうまゝさうまゝさうまゝさうまゝさう
まゝさうまゝさうまゝさうまゝさうまゝさうまゝさうまゝ

如雲外月云眞不妄之義如不異之義也眞故一切ノ妄想
ヲ離レ不異ノ故一切ノ我他彼此之差別ナシ也云小住云と
とひも云凡身のうちりしこひてある者の白

たひ云衣の由りとあるをうら拂ひ 羽笠

か白身の猶もあるとあるをうら答むればいふとある身はままりある体
こは作者は小手くとあるをうらさる公の答めを答めるとある
くあるといふとある中納めたり平或い実方の答めの付を
ありひまて旅之旅とあるにさる以て中小答めをあ拂ひ
といて旅才のとあるをうら体を雲上小作りとあるとある人
一句罪人の体小まやしといふ作りとある小奥ゆりといふと

筆輿ゆりに木瓜乃山ある 野水

あるといふ旅才のとあるをうら罪人のとあるとあると

えんといふまを押出してけりとある筆輿の筆輿とある木瓜の
山谷は嶮岨乃容をうらとあるとあるといふ人をありとある
輿のとあるとあるとあるとあるとあるとあるとあるとあるとあると
ゆりとあるとあるとあるとあるとあるとあるとあるとあるとあると
といふとあるとあるとあるとあるとあるとあるとあるとあると
用ちといふと

身のとあるとあるとあると坐小泪ととあると 芭蕉

けりとあるとあるとあるとあるとあるとあるとあるとあるとあると
か白身の筆輿を遠流の人と定といふとあるとあるとあるとあるとあると
といふとあるとあるとあるとあるとあるとあるとあるとあるとあるとあると
屍をありとあるとあるとあるとあるとあるとあるとあるとあるとあると
史記賈誼傳漢孝文帝二年河南守吳公

治平為天下第一以_レ為_レ廷尉薦洛陽人賈誼帝_レ以為_レ博
士時年二十一歲一年中至_レ太中大夫於是_レ改_レ法於天下
是故絳灌東陽侯馮敬之屬乃短_レ之曰洛陽人年少而初
學專欲擅_レ權紛_レ亂諸事於是天子疏_レ之故流而為_レ長沙王
之大傳也意_レ洛陽の賈誼文帝の_レち_レも_レ罪を_レ少_レうけ_レ
屈原のむ_レを_レ申_レて_レも_レん_レ亦_レ少_レ罪の_レ連_レり_レて_レも_レん_レ
送_レりて_レる_レを_レ答_レへ_レり_レつ_レの_レ烟_レの_レ種_レも_レ多_レし_レん_レ亦_レ唐詩
長信宮中草年々愁處生_レを_レも_レ思_レへ_レ合_レせん_レん_レん_レ

と_レ合_レん_レの_レ苦_レを_レも_レ思_レへ_レあ_レあ_レの_レも_レん_レ 荷_レ兮

左_レ代_レの_レ白_レり_レて_レ樹_レ下_レる_レ上_レを_レ極_レと_レる_レを_レ斗_レの_レ宿_レ存_レな
附_レて_レ茶_レ昆_レ所_レを_レ卧_レと_レる_レと_レも_レ思_レへ_レ合_レせん_レん_レん_レ
と_レ兼_レを_レ施_レる_レと_レも_レ思_レへ_レ合_レせん_レん_レん_レ

り_レ苦_レ白_レの_レひ_レき_レを_レも_レ思_レへ_レあ_レあ_レの_レも_レん_レ 荷_レ兮
り_レ苦_レ白_レの_レひ_レき_レを_レも_レ思_レへ_レあ_レあ_レの_レも_レん_レ 荷_レ兮

泥_レの_レも_レん_レ 尾_レを_レり_レ 知_レを_レ捨_レひ_レて 杜_レ國

け_レ白_レの_レ在_レ子の_レ故_レの_レを_レも_レ思_レへ_レあ_レあ_レの_レも_レん_レ 莊_レ子_レ曰_レ吾_レ聞
楚_レ有_レ神_レ龜_レ王_レ中_レ筭_レ而_レ藏_レ之_レ廟_レ堂_レ之_レ上_レ此_レ龜_レ也_レ寧_レ死_レ為_レ留_レ骨
而_レ貴_レ乎_レ寧_レ其_レ生_レ而_レ曳_レ尾_レ於_レ塗_レ中_レ乎_レを_レも_レ思_レへ_レあ_レあ_レの_レも_レん_レ
こ_レを_レ知_レへ_レあ_レあ_レの_レも_レ思_レへ_レあ_レあ_レの_レも_レん_レ 莊_レ子_レ曰_レ吾_レ聞
人_レを_レ多_レん_レて_レも_レ思_レへ_レあ_レあ_レの_レも_レん_レ 泥_レの_レも_レん_レ 尾_レを_レり_レ
泥_レの_レも_レん_レ 尾_レを_レり_レ 知_レを_レ捨_レひ_レて 杜_レ國
を_レも_レ思_レへ_レあ_レあ_レの_レも_レん_レ 楚_レ網_レ經_レて_レも_レ思_レへ_レあ_レあ_レの_レも_レん_レ
殺_レへ_レあ_レあ_レの_レも_レ思_レへ_レあ_レあ_レの_レも_レん_レ 殺_レへ_レあ_レあ_レの_レも_レん_レ

身を勤むことなほけ拾ちたりは拾ちてふけぬるものなり
 菩薩よななのちりくるべし——行菩薩菩薩のふよちりくともうよ
 乃ちあきけり又いよそち母うきあひあぬるふもいよいよ
 又母のちりま——娘のきり

清幸ふらむのみるなり 重五

泥のくひのぬれはうらうらうらうらう一掃して川橋の清幸と附ころち
 白の泥よりあききふ典葉はきあきと解きし清幸ふとちりともいよ
 ちりてい

あしひる年の小角豆れ花すらし 野水

あしひる年の小角豆れ花すらし 野水
 早水の時ふらとちり早魁とてそつ候を附ころち
 夏日本長愁民とちりあききふふらうらうらうらう早後田家の幸善を惜
 ちりあききふふらうらうらうらうらう

菅をむちりては白炭圍つく白羽笠

あしひる年の小角豆れ花すらし 野水
 早水の時ふらとちり早魁とてそつ候を附ころち
 夏日本長愁民とちりあききふふらうらうらうらう早後田家の幸善を惜
 ちりあききふふらうらうらうらうらうらう

芥子尼の小坊あしは 荷雪

ちりあしひる年の小角豆れ花すらし 野水
 早水の時ふらとちり早魁とてそつ候を附ころち
 夏日本長愁民とちりあききふふらうらうらうらう早後田家の幸善を惜
 ちりあききふふらうらうらうらうらうらう

あしひる年の小角豆れ花すらし 芭蕉

あしひる年の小角豆れ花すらし 芭蕉
 早水の時ふらとちり早魁とてそつ候を附ころち
 夏日本長愁民とちりあききふふらうらうらうらう早後田家の幸善を惜
 ちりあききふふらうらうらうらうらうらう

ものすぢあゆむ折るりて弄あきかちるる

志 山 くに飯まのつく月の前 重

あふまきとまきり寺に付たりとまきりけけのまきを飯まの
とくと作りしるありしる詩は深林人不知明月来相
照るまき出くわて寄まの体りくつてけり

志 山 くにまきりひのわやうり 杜國

まきりまきりあうり松屋を付て月のおくとりあはまき
の体を見わうりまきりあうりまきの一字に傍りり

志 山 くに松屋あうりまきり片鹿 羽笠

まきりあうり松屋あうり山家の体を付たり釣柿の家松屋
まきりまきのまきりまきりあうりまきのまきり

志 山 くに肩はくりり母の喪入 野水

あは起性の付とあふの体りまきを喪あまて付たり
喪親者居倚廬賤者居聖室 宰我问三年之喪期已
久矣子曰夫君子之居喪食不甘聞樂不樂居所不
安三年之喪天下通喪也 右論語取意 山濤居母喪
負土成墳手植松柏

志 山 くにえ政のまきり杖と破ぬる 芭蕉

あふ母の喪り入とまきり孝人の人をん出りてえ政と付り
まきりえ政に塞乃母を肩あて涼まきり甲州身延山を
訪わたり孝人の人をん喪りあうり居て悲欲のまきり杖
と破ぬる杖と破ぬる杖と破ぬる杖と破ぬる杖と破ぬる
杖と破ぬる杖と破ぬる杖と破ぬる杖と破ぬる杖と破ぬる

伏見本情の鏡も形をく川 荷子

は世をありくろく一途伴のえ改り枝は深し破れ伏見
あまこの花の鏡のこめお折るここのまどくまの二の表
さくろ曲節アんくさくおと大虫をのつまより附るるく

いろあうさ男猫ひとりつを控ひて 杜園

まの鏡もさうつとらる入相のまをさくくあーさうとあ
るく一白まのいお家うらるる伏見本情乃民たよ猫さうの女
京のたくれ伴一きおくく飼猫の夕アうり附るるをた
つあなく伴こ性さうさ男猫の中のもお家おの居るて
出ちりくを疎あうさくおの飼馴れお控ひてあうさ
るく一たくのさぬらくさああさう附て

昔のま〜くすの二宮もいれをくわ 重五

猫控のめくくさく猫をさする人を附るくまのくまの婦女
敷ひさけいしきさうものおさくくまのさかろくく
猫の性まを豊くくものさけいさの宮とく金まの体を
一白の越向とありさうさくく女このまおをもよせ合
せしあうさうま

水干を秀白の髪わりのや〜 野水

けりいさのり一髪をよとらるくく秀白の竹を白らせたん
さけい秀白の髪とらまうくく一さう砂とらうよ水干と付て
妻のら〜この初さうおありきさ秀白をね〜る人〜成人の
けいけいさうり〜くお白を照〜る人ね白の二さの白ら
うら〜おり〜もさけい竹を白らせて秀白の髪とらうら〜く
ち〜ら〜く秀白の髪とら〜くね白〜くさうさう

とりある理らしんや後人多と考ふべし

山ノ茶ホクヒ白くあまのころりー 羽笠

けき白もそのり一羽のき白とさうして松のたきの山茶ホクヒ
を白くせしむるのよろりーしんや後人多と考ふべし
るの所乃脱きしるまじきなりー

追加

いりしんやころりーしんや後人多と考ふべし 羽笠

けき白もそのり一羽のき白とさうして松のたきの山茶ホクヒ
を白くせしむるのよろりーしんや後人多と考ふべし
るの所乃脱きしるまじきなりー
いりしんやころりーしんや後人多と考ふべし 羽笠
けき白もそのり一羽のき白とさうして松のたきの山茶ホクヒ
を白くせしむるのよろりーしんや後人多と考ふべし
るの所乃脱きしるまじきなりー

抑して素ふるるをさるしんや後人多と考ふべし
しんやころりーしんや後人多と考ふべし
いりしんやころりーしんや後人多と考ふべし
の現物をととまきし

抑して素ふるるをさるしんや後人多と考ふべし 荷兮

けき白もそのり一羽のき白とさうして松のたきの山茶ホクヒ
を白くせしむるのよろりーしんや後人多と考ふべし
るの所乃脱きしるまじきなりー
その場りしんや中しんや後人多と考ふべし

抑して素ふるるをさるしんや後人多と考ふべし 重五

けき白もそのり一羽のき白とさうして松のたきの山茶ホクヒ
を白くせしむるのよろりーしんや後人多と考ふべし
るの所乃脱きしるまじきなりー

冬日解

小中一冊既刻

深更況 車蓋著

寛政八辰七月官許

文化六己正月發兌

蕉門俳諧書林

三系寺町西

菊舎太兵衛梓



蕉門俳諧書目録

京三条通寺町西

菊舎太兵衛藏

七部拾遺

先の七部集に洩くゝ七系と
小刻也

全二冊

鶴のあゆみ

此作は紅紙

熱田二系仙

一ツは

四部録

そとにあり評あり一と名乃書
四集と小刻也

未刻全二冊

田舎句合

蕉系評註
其角発白

為整屋句合

蕉系評註
松風発白

未刻全二冊

格外弁

そとにあり評あり一と名乃書
を扱奉一七論セ一書一
一冊

三草紙

白内、未三紙、全三冊、陶更技

先んて門人に書本あり、抄本を伊賀土著
の正なりなり大工傳授不置ありし

芭蕉誌

全二冊 肥後文曉著

芭蕉公著門人ふふ抄本あり、抄本を玄未小松等より
ありしを長崎お七より記し、書なり

冬北日注解

全二冊 浪華升六著

法家九流を多く解く、冬北の解り
共に世工傳を多く抄本ありし

かけこ

首書に多きをか、古今諸名家ありし
あつて抄本伝授を多し、全二冊

道方便

古人明水の著乃、乃抄本あり
刪補あり、書八

全二冊

此書は門人伝授の抄本を多く古抄本の白紙等より
付たか、伝授ありて、古抄本と抄本より、乃の佳境あり

梅翁宗因發句集

全一冊 浪華一炊菴著

世説

古今の事、乃内人ありし、ありし

全五冊

芭蕉翁消息集

乃乃書傳傳授の抄本ありし、乃の抄本ありし
并し、抄本ありし、全一冊、陶更著

夫未文

玄未浪化傳授の抄本ありし、乃の抄本ありし
いし、一巻を乃の抄本ありし、全一冊

麻か

傳授の抄本ありし、乃の抄本ありし
全一冊、栗津重厚著

一夜四哥仙 樗良 葦村 几董 嵐山 續 全二冊

同 續 曉臺 青蘿 几董 月溪 續 全二冊

中興 六家集 樗良 葦村 麦水 青蘿 曉臺 蘭更 全六冊

今より、葦門と称せり家多きは六る、その中、葦村と云ふは、
中興の名家、其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、
其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、 懐中本 壹冊

四季 袖巻し子 懐中本 壹冊

四季 系車 後工、其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、
古人、其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、

葦村七部集 其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、
未刻 小刻と云ふものと云ふ 全二冊

其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、
読明鳥 五車反古 花鳥篇 能事

同文集 其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、
未刻 全二冊 洛 月居輯

玉藻集 其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、
未刻 全二冊 洛 葦村著

樗良集 其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、
未刻 全三冊

樗良拾遺 其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、
未刻 全二冊 二集、追加して

百家仙 中興、葦門、几董、百人、其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、
全一冊

八仙哥 其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、其の著し、
全一冊 洛、夫左著

若葉集

今河内家三十二人采乃逸翁像を加ふ
全一冊 玉屑著

伊丹風流

鬼貫白選七車ホリ
全二冊 櫻葉紫英編

今風流

四季發句集 全二冊 洛其成編

は出らるる海法園の風洞とあるが、その四季の発句とあり、
之と辨りしよと入集の玉屑と投し、終るるは、
揚志

揚志

とて、終るの附合七車、終るは、
終るの附合七車、終るは、
終るの附合七車、終るは、

俳題正名

此書は四季の題に正し、
全一冊 伏見啓喬著

俳諧新式

四季の題に正し、
全三冊 伏見啓喬著

俳諧一技起請

此書は俳門人、
全一冊

蕉門一夜口授

蕉門の口授、
全一冊 加賀麦水

季寄手勝手

情中、
全一冊 加賀麦水

是、夏、冬、春、三、
全一冊 加賀麦水



